

『新生』論

——その「構想」の特色について——

橋 浦 史 一

(1) 『新生』についての高名な論稿に、平野謙氏の論稿と瀬沼茂樹氏の論稿がある。いずれも『新生』という文芸作品の成立事情に、藤村の実生活上の利害関係を想定して論じられた論稿であった。これらの論稿には、『新生』第二巻において、「岸本」が到達した心境として、同じ言葉の指摘がある。「もはや捨吉は『誰を相手に言葉の上の争ひをしようでは無かつた。唯自分を投出さうとして居た。そして一切を生命の趨くままに（一）委ねようとして居た』のである。」「かくて『岸本の書き溜めて置いた懺悔の稿はポツポツ世間へ発表されて行つた』のだ。」と言うのが、平野氏の指摘であり、一方「『一切を生命の趨くままに委ねよう』（一一四）かくて大胆な『新生』の発表となつた。」とし、その『新生』発表の結果として「捨吉」が導かれて行つた世界は『泣いたり笑つたりしたこととも沈まつて行つて、愛のまことだけが残る時も来るだらう。斯う岸本は考へて、自分の小さな知恵や力で奈何することも出来ないやうな『生命』の趨くままに一切を委ねようとした』（一四〇）いのちの、自然な生れたままの素朴な世界であつた』と言うのが瀬沼氏の指摘で

ある。いずれも「一切を生命の趨くままに委ねようとして居た。」と言う「岸本」の心境が、「懺悔の稿」の発表へと導く力であつたことを指摘しており、瀬沼氏は、それがさらに作者の『新生』という文芸作品発表の心境であつたとまで断じている。一方、平野氏は、「作者とその作中人物とを混同して論評の筆をすすめるなど、批評のイロハもわきまえぬやりかただが、私の叙述はそのようにしやすくすみ得なかつた。」「『新生』という作品自体がそのように私を強要してやまぬのだ。ここにその創作方法の重要な徴表がある。」と述べているところから、平野氏の言う「岸本」は藤村であり、「懺悔」は『新生』であると置き換えてもさしつかえないということになる。とすれば平野説も又、瀬沼説と同様の事柄を述べているということになる。「一切を生命の趨くままに委ねようとして居た。」という言葉は、藤村の『新生』発表へと踏み切らせる大きな力となつた、そういう意味で藤村の実生活に深く根ざしたいわば回心の言葉であつたとするのが両氏の見解であつたと言つてさしつかえあるまい。

しかしこうした見解は必ずしも当を得たものとは言えない。藤村には渡仏前大正元年十二月に、『文章世界』に発表した「Life」と

(2)

題する文章があり、「Life」をして趨くままに趨かしめよ。」と彼は記している。又、大正元年、藤村は、佐久間芳子の日記に記した感想文中にも『「生」をして趨くままに趨かしめよ。』と記している。この言葉は渡仏前、駒子との間に「新生」事件が起つた年に記されたものである。公私にわたって記されたということは、藤村が当時この言葉をいかに深く人生観上の言葉として心にいだいていたものであつたかを推測させるのである。

山田晃氏は、論考『「新生」』の中で、「Life」をして趨くままに趨かしめよ。』(『Life』同上(『後の新片町より』大1・12―筆者注))という表現は、この敗北(近親相姦という人間性に対する完全な敗北―筆者注)の上に居すわつた時の捨ぜりふであり、これは『新生』最終章の『自分の小さな智慧や力で奈何することも出来ないやうな『生命』の趨くままに一切を委ねやう』といふ『重荷を卸した』後の感慨と微妙なかたちで呼びかわす。」と指摘している。山田氏の論考には、佐久間芳子の日記の指摘はない。しかしこの言葉は温情あふれる佐久間日記の感想の言葉の中に記されてもいるところから「捨ぜりふ」とは考えられないのである。又、山田氏は『「新生」最終章』の『重荷を卸した』後の感慨と微妙なかたちで呼びかわす。」としてゐるが、この指摘はややあいまいなところがある。『新生』最終章に記された問題の言葉は、「微妙なかたちで呼びかわす。」といった性格のものとして作品の中にとりあげられたものではない。そこには『新生』の作者藤村の、作品制作上の、明確な構意図があつてとりあげられたものではなかつたか。『新生』序の章の一には、

彼の前に披げてあつたものは、めつたに友人から貰ふことの出来る手紙でもなかつた。(中略)読んで行くうちに、彼は何よ

りも先づ人生の半ばに行き着いた一人一人としての友人の生活のすがたに、その告白に、ひどく胸を打たれた。ある夕方が来てみると、あだかも彼方の木に集り、是方の木に集りして飛び騒いで居た小鳥の群が、一羽黙り、二羽黙り、がや／＼とした楽しい鳴声は何時の間にか沈まつて行つたやうに、丁度左様した夕方が岸本の周囲へも来た。中にも、この手紙を呉れた友人が中野の方へ新しい家を造つて引移つてからといふものは、ずっと声を潜めてしまつた。ほんとに黙つてしまつた。

という一節がある。この『新生』序の章の一の友人の告白後の描写を記した一節と、『新生』の最終章、第二巻百四十の「岸本」の告白後の描写とは正確に対応する形で描かれているのである。

岸本は斯の手紙(節子からの手紙―筆者注)を繰返し読んで見て、彼女と共に送つた年月の間のことを振り返つてみる氣に成つた。丁度あの夕方の木枝に集まるがや／＼とした鳥の声が沈まつて行つて一番最後に残るものは唯一つの小鳥の声であつたといふ歌の文句のやうに、泣いたり笑つたりしたことも沈まつて行つて、愛のまことだけが残る時も来るだらう。斯う岸本は考へて、自分の小さな知恵や力で奈何することも出来ないやうな『生命』の趨くままに一切を委ねようとした。

手紙の記述や小鳥の比喩の描写によつて、『新生』の最初の章と最後の章との対応は明らかである。これはやはり作者藤村の構成上の意図を認めなければならぬ表現であると考えられよう。そしてこうした表現の中に、「中野の方に住む友人」のものとは別に、「岸本」の『生命』の趨くままに一切を委ねようとした。」と言ふ感慨が記されているのである。問題の言葉が、『新生』の最後に到達した「岸本」の感慨としての重要な言葉であることは、小説の文脈上

からみて明らかである。

『新生』の中で、「節子」はしばしば「小鳥」にたとえられてい
る。「彼ゆゑに傷ついた小鳥のやうな節子を堅く抱きしめた。」(第
一卷二十八)とか、「節子は暇さへあれば炬燵に齧りついて、丁度
巢に隠れる鳥のやうに、勝手に近い小座敷に籠つてばかり居るやう
な人に成つた。」(第一巻三十五)とか、「飛去りもしない小鳥を傷
つけたと気がついた時はもう遅かつた。血にまみれながら是方を見
た時の目は小鳥ながらに恐ろしく、その小さな犠牲を打殺すまでは
安心しなかつたことがある。(中略)丁度あの小鳥の眼が、想像で
描いて見る節子の眼だ。」(第一巻百十一)とか、「彼女は狭苦しい
籠の中から出て来て、実に幾年振りで、のび／＼と夏の朝の空気を
呼吸する小鳥のやうであつた。」(第二巻三十二)とか、「もと／＼
遠い旅にまで逃れて行つたほどのものが奈何してあの震へる小鳥の
やうな節子を傍観し得られたらう。」(第二巻四十四)とかがその例
である。「旅人よ。何故お前は小鳥のやうに震へて居るのだ。假令
お前の生命が長く、恐怖の連続であらうとも、何故もつと無邪気
な心を有たないのだ。」(第一巻百二十一)など、「岸本」等にも小
鳥の比喩が使われる場合もあるが、総じて「節子」への比喩が印象
的である。藤村の『新生』最初の章と最後の章との意図は明らかで
ある。

二

(3)

『新生』第一巻の十一には、「汝 わが悲哀よ、猶賢く静かにあ
れ。」というボードレールの言葉が記されている。「節子は極く小さ
な声で、彼女が母になつたことを岸本に告げた。」という周知の言
葉が記されるのは、第一巻の十三においてである。ボードレールの

言葉は、まだ「節子」と共に破滅の道に進む前の描写の中に引用さ
れたものである。先に指摘した佐久間芳子の日記の中にも、「汝、
わが悲しみよ、猶賢く静かにあれ」ボードレールの詩集より「藤
」と記されている。又、大正元年十二月『文章世界』に発表され、感
想集『後の新片町より』の巻頭に置かれた文章、「秋の歌」にも、
「孤独な詩人は唯臆のやうに眼ばかり光らせてあらゆる生活に興味
を失ひ寂寞と悲痛の底に震へて居たかといふに、決して左様で無か
つた。『汝、わが悲しみよ、猶賢く静かにあれ。』と彼は歌つて居る。」
と記されている。『新生』の作者は、実生活の時間にそつて忠実に
ボードレールの言葉を『新生』第一巻の十一に記しながら、「生」
をして趨くまゝに趨かしめよ。」と云う言葉を、岸本の渡仏前の言
葉としてはとり上げず、第二巻の百十四に、

ひよつとすると、自分これぎり兄を見る時がないかもしれな
い。この考へが閃くやうに岸本の頭悩へ来た。彼は誰を相手に
言葉の上の争ひをしようでは無かつた。唯自分を投出さうとし
て居た。そして一切を生命の趨くまゝに委ねようとして居た。

と、「岸本」の「懺悔の稿」が「ポツ／＼世間へ発表されて行」(第
二巻百十五)くことを描くすぐ前の章と、『新生』最終章に記した
のである。これは、藤村の実生活上の心のあり様がそのまま『新
生』に描き込まれているとする見解に、異議をさしはさむに足る事
実ではあるまいか。この事柄に關しては『新生』の虚構性の指摘が
成り立ちそうである。

藤村には又、明治四十五年四月七日『読売新聞日曜附録』に発表
された、「オスカア・ワイルドの言葉」という文章がある。藤村が
明治四十五年四月、『中央公論』に発表した「柳橋スケッチ」の一、
「日光」で、オスカア・ワイルドに言及していることは周知の事柄

(4)

であり、渡仏前、藤村がオスカー・ワイルドに強い関心を示したことをうかがわせる。「オスカー・ワイルドの言葉」は次のような文章である。

オスカー・ワイルド曰く、『私は心から自己実現の清新なる様式を求めて居る。私が現在の要求はこれである。而して先づ第一になさざるべからざることは、世間に反抗せんとする苦い反撥の感情を脱し去ることである。』これ程反抗の精神に満ち溢れた言葉を、めつたに私は見たことが無い——しかも自由な感情の発露と、多分な涙のかゞやきを以て。

この言葉に対応する描写は、『新生』第一巻には見られない。しかし第二巻には見られるのである。たとえば、『どうかして彼は周囲のものに対する彼女の小さな反抗心を捨てさせたいと願った。叔父とか姪とかの普通の人情、普通の道徳の見地から、やゝもすれば冷い苛酷な眼を向けようとするものに対して、彼の執らうとする道は小さな反抗心を捨てるにあつた。』(第二巻六十六)とか、「彼の望みは、どうかして周囲に反抗しようとする彼女の苦い反撥の感情を捨てさせたいと思つて居たからで。それを脱け去る時が、ほんたうに彼女の延びて行かれる時と思つて居たからで。』(第二巻七十四)というのがその例である。こうした「反抗心」または「反撥心」を捨てる態度によつて、「岸本」と「節子」とが戦つたのは、「節子」の父「義雄」の「家」の倫理に対してであつた。「オスカー・ワイルドの言葉」に記された、「これ程反抗の精神に満ち溢れた言葉を、めつたに私は見たことが無い——しかも自由な感情の発露と、多分な涙のかゞやきを以て。」という藤村の言葉が蘇みがえるゆえんである。こうした照応はさらにもう一個所見ることができ、第二巻の百三に次のようにある。

『なんですか姉さんが帰つて来てから、余計にお父さんの調子が違つて来ました。私は人間ぢや無いやうなことを言はれて……』『何と言はれたつて可いぢやないか——そんなことを気にしたところで仕方がない。さういう苦い反撥心を捨てるサ。』(中略)『そこがお前、懺悔の心ぢやないか。何も修道院や尼寺まで行かなくなつて、宗教といふものは有るだらう。谷中の家を直ぐに寺院だと観る訳には行かないものかね。俺はまあ左様思ふんだが、反抗したところで無駄だと思つたら、さういふ反撥心を捨てゝる掛るんだね。』(中略)『お前と俺とは、もうこゝまで来たものだ。行くところまで行く外に仕方が無いサ。こんな日蔭者のやうな調子で、これが遣り切れるものかね。もつと生きて出ることを考へようぢやないか——』

この一節は、「節子」が「岸本」に「懺悔」を書くことを同意した場面の後に描かれた言葉である。「節子の快い承諾を得たことは一層岸本の決意を堅めさせることに成つた。」という言葉がこの一節の後に続く。「懺悔」の稿の筆を執り、二人の秘密を公にする決意と共に、こうした言葉が記されている。「私は心から自己実現の清新なる様式を求めて居る。(中略)而して先づ第一になさざるべからざることは、世間に反抗せんとする苦い反撥の感情を脱し去ることである。」と言ふ「オスカー・ワイルドの言葉」が再び思い起されてくる。

三

ところで、「新生」第一巻の百二十八には、「岸本」が「柳博士等と連れ立つて」「ペエル・ラセエズの墓地にあるアベラルとエロイズの墓」を訪ねた時の回想の場面が描かれ次のように記されて

いる。

彼はその周囲を廻りに廻つて二つ横に並んだ男女のすがたを頭の方からも足の方からも眺めて、立ち去るに忍びない気のことを出した。まるでお伽話だ、と彼は目に浮ぶ二人の情人のことを言つて見た。しかし、お伽話の無い生活ほど、寂しい生活は無い。彼は最早自分の情熱を寄すべき人にも逢はずに、この世を歩いて行く旅人であらうかと自分の身を思つて見た。左様考へた時は寂しかつた。其晩、岸本は遅く部屋の寝台に上つた。枕に就く前にも、床の上に半ば身を起して居て、若い時分の友達のことや、自分の青年時代のことを思ひ出した。あの早くこの世を去つた青木に別れた時から数へると、やがて二十年近くも余計に生き延びた自分の生涯を胸に浮べて見た。彼は唯持つて生れたまゝの幼い心でその日まで動いて来たと思つて居た。気がついて見ると、どうやらその心も失はれかけて居た。『左様だ。何よりも先づ自分は幼い心に立ち帰らねば成らない。』と言つてみた。旅に来てその晩ほど、彼は自分の若かつた日の心持に帰つて行つたことは無かつた。

その次章、百二十九には、「頑な岸本の心にも漸くある転機が萌した。」と帰国の決意へとつながる言葉が記される。こうした心境の変化は、作者藤村の立場から考えた場合、フランスにあって書き初めた「桜の実」の改稿版である『桜の実の熟する時』の執筆過程において生まれたものであつたかも知れない。一方、第一巻百二十八の引用部分に対応する叙述を、『新生』第二巻五十九に見ることが出来る。

彼は持つて生れたまゝの幼い心に立ち帰つて行ける日が漸くやつて来たことを思ひ知るやうに成つた。その時になつて彼は心

から自分の情熱を寄せ得るもののあることを見出した。その欲びを見出した。彼のやうに寂しい道を歩きつゞけて来たものでなければ、どうしてそれほど餓多渴いたやうに生の欲びを迎へるといふことがあらう。彼は自分のやうな旅人に与へられた自然の賜物であるときまで考へるほどにして、その新しい欲びに浸つて行くやうに成つた。

これは、「節子」との「新しい愛の世界が『岸本』の前にひらかかつて来た。」(五十八)時の「岸本」の述懐である。そこには「新生の芽」と言う言葉も出て来る。しかし、こうしたことを一応念頭に置いた上でなお『新生』第一巻の百二十八の「幼い心」に焦点をあてて、渡仏前の藤村の文章と照応させて見たい。

明治四十五年四月七日『読売新聞日曜附録』に、「子供と大人」と題する文章が発表された。

どうも私はまだ子供らしくて困る、どうかしてもつと大人に成りたいものだ、とある友達に話したことが有つた。すると、その友達が言ふには、『左様ですか、私はまたもつと子供に成りたいと思つてますよ。』と。

こうした言葉の書かれた翌月、明治四十五年五月一日から藤村は「ある婦人に与ふる手紙」を『婦人画報』に連載し始める。この作品は途中から「幼き日」と改題されて、藤村の渡仏によつて中断されるまで続いた。その末尾には、「それからそれへと幼い日のことを辿つて見ると書くべきことは多くありますが、こゝで筆を止めます。」「私は遠い旅を思ひ立つて、長く住み慣れた家を離れようとして居ます。」「今夜は斯の家で送る最終の晩です。」と記されている。

一方、明治四十五年四月発表の「日光」には、

左様だ、光と熱と夢の無い眠の願ひ、と言つた人もある。斯ういふ言葉を聞いて笑ふ人もあるだらうか。もしこれが唯の想像の美しい言ひ廻しでなく、實際斯の面白さうなことで満されて居る世の中に、光と、熱と、それから夢のない眠より外に願ひしいことも無いとしたら、奈様なものだらう。丁度私はそれに似た名状し難い心地で、二週間ばかり床の上に震へて居たことが有つた。

と記された。こうした生の倦怠の中であつて、「ある婦人に与ふる手紙」の筆が執られたのである。「幼き日」が後「生ひ立ちの記」と改題されたことは周知の事柄であるが、定本版藤村文庫第七篇の「生ひ立ちの記」の後に「において藤村は、その執筆時の心境を、『たゞ自伝の一部として書かうとしたものでもなく、』「自分の生命の源にさかのぼらうとする心を起した時にこれが書けた。」「これを書く間、わたしは殆んど一切を忘れてゐた。」と記している。年譜によると「幼き日」の執筆を始めた一ヶ月後、駒子と結ばれたらしいとの推測が成り立っているようである。『生ひ立ちの記』の後に「の言葉は、『生』をして趨くまゝに趨かしめよ。」という言葉を想起させるものがある。藤村はさらに渡仏までの間、大正二年一月から『文章世界』に『桜の実の熟する時』の改稿前の小説「桜の実」を書き始め、そして後の『桜の実の熟する時』に続く時期、すなわち佐藤輔子への愛の苦悩を脱するために漂泊の旅にあつた時期を童話として描いた「眼鏡」を、大正二年二月に出版して、翌三月二十五日渡仏のため新橋を發つた。

一方、『新生』に記された「岸本」の回心の言葉、「左様だ。何よりも先づ自分は幼い心に立ち帰らねば成らない。」という叙述に照応する、帰国後の藤村の実生活上の姿勢を示す事柄としては、初

版の傍題に「仏蘭西土産」と記され、「はしがき」に、「父さんは自分の子供等のことを思出す度に、何か外国の方で見たり聞いたりしたお話を書いて、それを太郎や次郎に送りたいと思つて居ました。これがそも／＼この小さな本を——『幼きものに』を作らうと思ひ立つたいはれです。」と記された童話集『幼きものに』の発表を見ることができそうである。後、藤村は、童話集『ふるさと』をも発表するが、これは「ある婦人に与ふる手紙」の發展として書かれた傾向が強いものである。こうした点を考慮に入れてもしかし、『新生』の中に描かれた「幼い心」に照応した関心を藤村が示したのは、渡仏後よりは駒子との問題が持ち上がった渡仏前の時期であつたと見る方が妥当なのではないだらうか。『新生』の初版で削除された『東京朝日新聞』初出稿の、「岸本」の渡仏前の描写の中には、「友人の青木に死に別れてから十七年にもなるその日まで、岸本は唯持つて生れた幼い心で動いて来たのであるから」とか、「彼は最早その日まで自分を導いて来て呉れたやうな自分の幼い心に聞いて見るの外は無かつた。」とかいふ言葉も見られるのである。この削除は「岸本」の「幼い心」の自覚によるフランスからの帰国の意志を、より効果的にするためのものであつたと考えられる。

又、「幼い心」の叙述に先立って、『新生』第一巻の百十三から百十九までは「岸本」の父の心への共鳴が描かれるが、藤村が父正樹の頌徳碑建立のための記念に、父の遺稿集『松か枝』を出版し、親しく父の思いに接したのは、駒子との関係が始まつた年の十一月のことであつた。

以上述べて来た事柄から考えられることは、「岸本」の渡仏中、あるいは『新生』第二巻で描かれた重要な事柄のいくつかは、事実との照応関係から推して、作者藤村が渡仏する以前すでに彼の心の

中では完了ずみの事柄ではなかったかと言うことである。『新生』が現実には忠実な「告白小説」であったならば、藤村は『新生』第一巻の「岸本」の渡仏中のこととして、あるいは第二巻に重い意味を持つて描かれることとしてではなく、第一巻に以上の事柄を描いたのではなかったらうか。

亀井勝一郎氏は「フランス旅行を決めた日に、岸本は節子に向つて、『好い事がある。まあ明日話して聞かせる。』と、たゞそれだけを告げる。(中略)この辺の描写は甚だ唐突で、節子がどんな反応を示したか、殆んど伏せられてある。何か大切なことを省略したのではないかと疑はれるのだ。(中略)彼は何を隠したのか、省略したのか。といふよりは、現はさうと思つても現はしえなかつたものがあつたのか。これは藤村の創作方法の根本にもふれる問題である。」と指摘しているが、この省略説には聞くべきものがある。加えて渡仏前の心境を作者は、『新生』第一巻と第二巻とにふり分け描いたのではなかったらうか。『新生』の描写によれば、「義雄」にあて、船中でしたためられた「書きにくい手紙」に対する返事は、「出来たことは仕方がない、お前はもうこの事を忘れてしまへ」「これは誰にも言ふべき事でないから、母上はもとより自分の妻にすらも話すまいと決心した」「世の中のことは、曲りなりにも奈様にか納りの着くものである」「お前は国の方のことに懸念しないで、専心にそちらで自分の思ふことを励め」と言った内容のものであつた。こうした返事に対して、『お前はもうこの事を忘れてしまへ』と言つた兄の心持に対しては、彼は心から感謝しなければ成らなかつた。「そのかはり、兄に手伝つて貰つて人知れず自分の罪を埋めるといふ空恐しさは、自分一人きりで心配した時にも勝つて、何とも言つて見やうの無い暗い心持を起させた。」(第一巻五十四)

と言うのが「岸本」の心境であつた。藤村に同様の体験があつたとするならば、兄にあてた手紙こそ、自己の「破戒」の覚悟を意味するものであつたはずである。『新生』では、「岸本」の渡仏が帰国の予定も持たない不確定性のもののように描かれているが、実はそうではなかった。この事については後述する。

四

ところで、『新生』第二巻の七十二には、「岸本が浅草時代の終にあたる自分の生活をデカダンの生活として考へるやうに成つたのも、あたかもその生活の中に咲いた罪の華のやうに節子を考へるやうに成つたのも、それは彼が遠い旅に出でからずつと後のことであつた。」と記されている。「岸本」は渡仏前、「節子」との関係は、デカダンの生活からおちついた「陥穽」とは思つていなかったことが了解される。『新生』第一巻の十三には、「節子は極く小さな声で、彼女が母になつたことを岸本に告げた。」とあつて、「壊れ行く自己に対するやうな冷たく痛ましい心持が、そのうちに岸本の意識に上つて来た。」と記される。「節子」が母となつたことで「岸本」は、「壊れ行く自己に対するやうな冷たく痛ましい心持」を自覚するわけだがしかし、その「節子」に対し、「箆笥から着物を取り出して貰ふというだけでも、岸本は心に責めらるゝやうな親しみと罪の深い哀さとを節子に感ずるやうに成つた。」(十七)と記される。この「岸本」の「節子」に対する思いは、『新生』第二巻で「二度結ばれるやうに成つた」(四十)後、「節子」に対して愛情をいだくやうになつた「岸本」の感情を思いおこさせる性格のものである。

一方、「節子」の方も、臆にむかつた「岸本」に給仕の役をひきうける折などは、「叔父と眼を見合わせることを避けよう」とし

て居るやうな場合でも、何時でも彼女の膝は叔父の方へ向いて居た。(二十二)と記されている。「岸本」も「節子」も「前途の不安」(二十二)を感じながらも、どこかに互にひかれるところがあつたわけである。しかし『新生』第一巻の二十四の冒頭に、「実に急激に、岸本の心は暗くなつて行つた。」という言葉が記される。「心に責めらるゝやうな親しみ」(十七)と言つた「岸本」の心境はその後消えて行き、「節子」との愛情関係は下降線をたどる方向で『新生』第一巻の世界は展開されて行くことになる。

『新生』第一巻の十五には、「節子は重い石の下から僅に頭を上げた若草のやうな娘であつた。曾て愛したこともなく愛されたこともないやうな娘であつた。特に岸本の心を誘惑すべき何物をも彼女は有たなかつた。」と記されている。しかし『新生』第二巻には、「彼は趣味に於いても不思議なくらゐる節子と一致して居た。彼女の髪、彼女の着物などは誰のにも勝つて彼の好みに合つた。」(七十六)とか、「お前は一体静かなことが好きなんだらう。そこが俺と一致するところかも知れないね。」(八十二)とか、「一体、節ちゃんは叔父さんによく似てますね。」(中略)『何事でも斯う物をひねつて考へるやうなところが、それはよく叔父さんに似てますよ。さういふ人達が二人揃つてしまつたんですから、奈何にも仕様がない。』斯の輝子の調子が岸本を笑はせた。」(百三十)とかと、「岸本」が「節子」に愛情を感じるだけの種々の要素を彼女が所有していたことが記されている。

『新生』のこうした記述に加えて、西丸四方氏は「陰気で、ひねくれた、頭のよい、自分に似た性質の姪にひどく惹かれたのは、宿命的なインセストへの傾向というより、性格的な一致のようみえる。こま子と、後妻の静子は多くの点で非常によく似た性質の人で

あつた。何れも暗くて、静かで、非常識で、しかし奥底には火がもえているやうな性格の人であつた。」と述べている。『新生』第一巻では「岸本の心を誘惑すべき何物をも彼女は有たなかつた。」(十五)と記されているが、「すくなくも彼が節子と共に辿り着きたいと願ふところは、多分に『友情』の混つた男女の間柄であつた。」(八十八)と第二巻に記されるやうな関係での結びつきは、渡仏前の藤村と駒子との間にはあるいは自覚されていたのではなかつたか。『新生』第一巻では「岸本」が「節子」との関係を断ち切る方向に小説は展開し、二人の関係を「畜生の道」(百一)とまで言うことになるが、藤村と駒子との関係はそうしたものとしてのみ始まつたとは考えにくいのである。

付け加えれば、『新生』第一巻の二十五には、ほとんど初版の体裁をとつた『桜の実の熟する時』の第二章が引用されているが、事実通りに描くとすれば、これは渡仏前の「桜の実」でなければならぬ。又、伊東一夫氏の指摘するように、『新生』第二巻の五十八には、『新生』第一巻初版の刊行の時日と同じ大正八年一月一日に『開拓者』に掲載した、「三人の訪問者」が引用されている。『新生』第二巻でこの文章が引用されるのは、「岸本」が「懺悔」の稿を発表する第二巻の百十五よりはるかに前の時点である。「三人の訪問者」は後、感想集『飯倉だより』の巻頭に置かれた文章である。藤村が飯倉片町に移つたのは大正七年十月であり、『新生』の『東京朝日新聞』への発表が開始されたのは、大正七年五月一日からであつた。こうした『新生』発表当時であつてさへ細かく読めば読者に疑問を起させるに足る、事実と反する矛盾を作者は『新生』の中に大胆にとり入れて描いているのである。たとえば平野謙氏は、『新生』では、諸人物の年齢、事件推移の歲月など、ややこ

るさいほど精確に再現されてある。その精密は現在流布されている藤村年譜の誤りを逆に訂正し得るくらいである。」とまで言っているが、しかし考察して来たように『新生』という作品は必ずしもそうしたこと言える作品ではない。『新生』は省略と書き分けという手法を用いた、ある意味での虚構性を抱合している作品であると言えようと思われる。

『新生』第一巻には渡仏後の「岸本」の心境として、「斯うした節子の手紙を読む度に岸本は嘆息してしまつて、所詮国へは帰れないといふ心を深くした。」(七十六)とか、「出来ることなら国の方に残して置いて来た子供等までも引取つて異郷に長く暮ししたいと願つて居た。」(七十八)とか、「所詮国へは帰れないと思ふ心の彼は、進んで戦地の方へ出掛けたいと願つたが」(九十二)とかと、「岸本」の帰国の時日についての不確定性が記される。そして「岸本」の帰国への決意は、やがて「幼い心」にたち帰らねばならぬことを自覚し、さらに「草木の再生がやがて自分等の再生であること」(百三十)に思い及び、「死の中から持ち来す回生の力」(百三十)を感じることによつてなされることになるわけである。しかしフランスに旅立つ藤村は、必ずしもそうした帰国の時日の不確定性を案じつつフランスに向かったのではなかった。大正二年三月六日『読売新聞』に発表された談話「出発前の感想」には、「今の予定では先づ三年ばかり巴里に居る積りですが、勿論語学の力も未熟ですから向ふへ行つても当分は田舎へ引込んで専念言葉を研究し其後緩くり巴里へ出てしんみり巴里の生活を観察する考へです。」とあつて、フランス滞在の期間が三年であることを明らかにしている。事実藤村のフランス滞在の期間は三年であつた。大正四年六月頃フランス滞在費用の件や故国に残して来た人々の生活上の問題なども

あつて、その年の十月末に帰国する予定をたてたが、有島生馬から藤村後援会が生まれる旨の連絡があつて、フランスでの滞在期間が二年半になるところを三年に延期されたことは周知のことである。『新生』第一巻の三十五、『東京朝日新聞』初出稿には、「時が待つて居ないでは無かつた。生れて来るものゝ方で待つて居なかつた。岸本はすくなくも三年を海の外に送りたいと思つたから、その積りで旅仕度を急いだが」とあつて、節子の胎内に宿つた新しい命の成長に追いかけられるような心境が描かれる中で、「岸本」のフランス滞在が三年であることが示されている。この部分は、『新生』初版では削除されて、「岸本は出来るだけ旅の支度を急がうとした。」と改められた。この削除は、「岸本」の帰国のうながしがひとえに「幼い心」への自覚から芽ぐんできたものであることとしたかったための作者の意図によるものであつたと考えられる。このことは「幼い心」への関心が、渡仏前の藤村の心のあり様に深くかわつていたのではなかつたかという疑問との関連の上で注目されなければならぬ事柄であろう。ここにも作品としての『新生』を描く作者の姿勢が示されていると考えられるのである。

五

『新生』第二巻ではフランス滞在の期間が「三年」であつたことを示す、その「三年」の語がくり返し記される。ところでこの「三年」の語の由来についてはどうであらうか。『新生』第一巻序の章の五には、「その死んだ沈黙で、彼は自分の身に襲ひ迫つて来るやうな強い嵐を待受けた。」とか、第一巻の十五には、「嵐は到頭やつて来た。」とかとあるが、平野謙氏が指摘したように、『新生』には「嵐」の語が多く書き込まれている。この「嵐」の語からシェイクス

ピアの戯曲『テムペスト』（嵐）を連想することはそう困難なことでもあるまい。藤村はすでに早く、仙台時代以前に、『テムペスト』に接していた。このことは感想集『飯倉だより』に収録されている「文学に志した頃」や「初学者のために」などの文章によって知ることができる。『テムペスト』には、ミラノ公「プロスペロー」がその弟「アントーニオー」の裏切りによって、娘「ミランダ」と共に国を追われ、朽ちかけた小舟に乘せられて嵐の海に投げだされ、かろうじて海原の中の孤島に漂着することが描かれ、後、「プロスペロー」の秘術によって嵐が招来されて加害者達もその孤島に漂着し和解が成立することが描かれている。『新生』第一巻の四十一には、「実際彼は生きて還るか還れないか分らない遠い島にでも流されて行くやうな心持で、新橋の停車場の方へ向つて行つた。」と記され、『新生』第二巻の一には、「三年近い月日が異郷の旅の間に過ぎた。遠い島にでも流された人のやうに自分の境涯をよく譬へて見た岸本は、自分で自分の手錠を解き腰縄を解く思ひをして、詫しい自責の生活から離れようとして居た。」と記されている。豊田実氏は、『テムペスト』について「島で加害者と被害者が相会し復讐が変じて赦しとなるいきさつが約三時間の出来事であり、上演時間とはほぼ一致している。」と指摘している。「三年」という期間と「三時間」という時間の間の奇妙な数の符合は偶然のことからであつたろうか。『新生』第一巻の十には、「『あれは他の家の子供達です。』節子は勝手口に近い小部屋の鼠不入の前に立つて居て、それを答へた。何となく彼女は蒼ざめた顔付をしていた。」とか、「節子にいわせると、彼女が仏壇を片付けに行つて、勝手の方へ物を持運ぶ途中で気がついて見ると、彼女の手の掌にはべつとりと血が着いて居た。（中略）『私も変に思ひましたからね、鼠かなんかの故ぢやない

かと思つて、婆やと二人で仏さまの下まですつかり調べて見たんですけれど……何物も出て来やしません……』とかいふ言葉が記されている。「節子」が「岸本」に「彼女が母になつたこと」（十三）を告げる場面の予徴としてこうしたことが描かれているわけである。後の作品ではあるが、藤村の小説『嵐』に描かれた「鼠の死骸」に象徴されるものが「新生」事件の余韻を示していることはよく説かれるところである。

一方『テムペスト』には次のような一節がある。

奴等は早速吾等二人（プロスペロー」と「ミランダ」——筆者注）を船に乗せ、沖に向つて漕出したが、数運彼方に朽ちかけた小船が一艘用意してあつて、それには船具一つ無い、綱も無ければ、帆も帆柱も無く、鼠共がとうに愛想を尽かして逃出してしまつた代物、私等はそれに移された、海に向つて叫べ、海はそれに応へて猛り狂はう、風に向つて吐息をつけ、風は憐みの息を吹返し、その思遣りも却つて仇にならうと言はむばかり。

こうした双方の鼠の語の使用にも『新生』と『テムペスト』との間のかかわりが考えられるのである。又、『新生』第二巻の七十二には、「節子を中心にして起つて来た強い嵐は過去の生涯の中での一つのキャタストロフであつたやうに見えて来た。」とか、「斯う節子はその手帳のはじめに鉛筆で書きつけて、それから難破船の乗組員といふ心持が随分長く続いたが、今はもう自分の多病なことも何もかも忘れて君と共に生きたいと思ふと書いてあつた。」とか記されている。こうした叙述も『テムペスト』の世界との相似性を思わせるものがある。『新生』の結末部分、『東京朝日新聞』初出稿には「愛を完成するために別れて行つたやうな節子の旅の意味の深さを思つた。」とある。「プロスペロー」が娘の「ミランダ」に託した

思いと「岸本」が「節子」に対していだいた思いとの照応関係がここに見られると思われる。藤村が『テムベスト』の「プロスベロー」と「ミランダ」に「岸本」と「節子」をなぞらえたことは、兄に宛てた「書きにくい手紙」によって、自己の「破戒」が公になった後の二人の境遇を予想してのことであったと考えられる。事実を引きもどして言えば、そこに「三年」の意味があった。藤村は、旧い倫理の体現者であると判断していた兄を、終局の理解者とは考えられず、『テムベスト』の主旨に心を寄せて、新しい世代に和解の希望をつないだのであった。

藤村は『新生』第一巻の八十五に、「して見ると自分さへ黙つて居れば——黙つて、黙つて——左様岸本は考へて、更に『時』といふものを待たうとした。」とか、第二巻の百三十一に、「いづれにしても、彼女は今々直ぐに思ふところへ出て行かれるやうな人ではなかつた。『時』といふものを待つのは外はない人であつた。」とか記した。藤村は大正五年七月に帰国したが、その年十月三十日の『時事新報』に、「田山君の『時は過ぎゆく』』という文章を発表している。この文章で藤村は田山花袋の小説『時は過ぎゆく』を評して次のように述べている。

この作では、『時』は人間を踏みこむ暴君でなくて、巨人の如くに歩み行く力である。過去に於て然るが如く現在に於ても然りである。そこに私はある物足らなさを感ずる。(中略) 何故に作家は『時』の力を頼まうとする人間の最後の望みやあきらめや哀れみやを写さうとはしなかつたであらうか。

藤村は駒子が母になつたことにより、故国を離れ、フランスで生活を送ることによつて「『時』の力を頼まう」とした。しかしそれは『新生』からうかがえるような無計画な海外生活ではなかつた。

藤村には「三年」という明確な期限が出発当初から自覚されていたのである。こうしたところにも「『時』の力を頼まう」とする緻密な人生設計者としての藤村の面目がうかがえるのである。

注

- (1) 『島崎藤村—人と文学—』
- (2) 『島崎藤村』(角川文庫)版
- (3) 佐久間芳子が結婚生活に破れ、箱根の底倉に隠棲して書いた「底倉日記」と題した日記。伊東一夫編『島崎藤村事典』に詳しい。
- (4) 『新生』(『国語と国文学』昭和三十六年十月)
- (5) 『新生』第一巻は、やがて描かれるはずの『桜の実の熟する時』の「岸本」と「勝子」との出会いを描く後半部分と、漂泊の旅での生活を描いた童話「眼鏡」との世界になぞらえられ、『新生』第二巻は、「岸本」が漂泊の旅から帰る『春』の位置になぞらえることができよう。
- (6) 『島崎藤村論』
- (7) 『島崎藤村の秘密』
- (8) 『島崎藤村研究—近代文学研究方法の諸問題—』
- (9) (1)に同じ。
- (10) 瀬沼茂樹著『評伝島崎藤村』の注記にも、『中央公論』に掲載された『島崎藤村氏の洋行と本誌』(大正二・四)の「彼地滞在の期間は凡そ満三年の予定なりといふ。」の引用を示し、「これによつて外遊期間三年の予定であつたこと」が指摘されている。
- (11) (1)に同じ。
- (12) 豊田実訳『あらし』(『岩波文庫』版)の解説。
- (13) 福田恆存訳『あらし』第一幕第二場。
- (14) 外に『東京朝日新聞』初出稿にあつて後、削除された部分にも、「どうやら葬り隠したつもり罪過が『時』といふもの大きな力を

借りてさへ奈何することも出来なくて、丁度灰の中に隠れた紅い燄のやうに、まだ意地悪く生きて居るもののやうにも思はれて来る。」などである。

(付記)

『新生』の構想については、たとえば、相馬庸郎氏に、「『新生』は一見岸本の私生活を中心に、自然的時間の流れにそって無難作に構成されているように見えながら、少しくわしく検討してみるなら、作者の計量が周到にされていることに気づくだろう。その効果の成功・不成功は別問題であるが。」(『『新生』試論』(『日本近代文学』昭和四十四年十月)との指摘がある。

なお『家』から『新生』への藤村の志向、「新生」事件とのかかわり等については、拙稿『『家』から『新生』へ―作品解釈の視点―』(『文化』第三十八巻第一・二号)において述べたことがある。